

季節の百人一首

春

33番

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
→ 穏やかな春の光の中、なぜ桜は落ち着きなく散るのだろう

61番

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな
→ 昔の奈良の都の八重桜が今日は宮中で美しく咲いている

夏

36番

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ
→ 夏の夜は短く宵のうちに明ける。月ほどの雲に宿るのか

81番

ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる
→ ほととぎすの声の方を見れば有明の月だけが残っていた

98番

風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける
→ 風にそよぐ櫓の小川の夕暮は禊が夏の証だ

秋

1番

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ
→ 秋の田の仮小屋は屋根が粗く袖が露に濡れ続ける

5番

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき
→ 奥山で紅葉を踏み鳴く鹿の声を聞くと秋は悲しい

87番

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮
→ にわか雨の露も乾かぬ葉に霧が立つ秋の夕暮れ

冬

4番

田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
→ 田子の浦に出ると富士山に白く雪が降り積もっている

6番

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける
→ かささぎの橋に白い霜が置くのを見ると夜が更けた

